

第 40

896

初篇



卷中遭難人名

△印戰死セー人

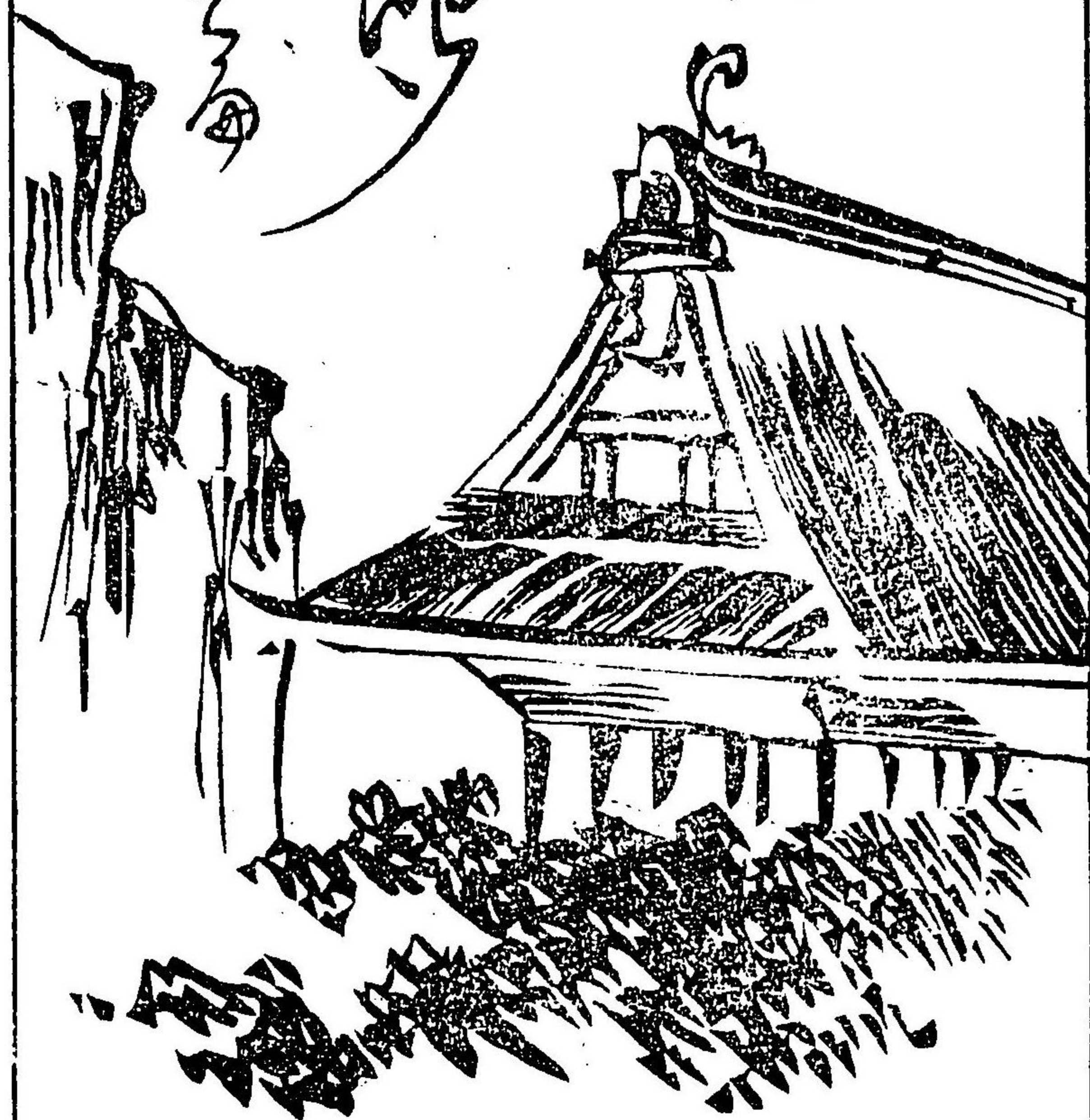
全權公使花房義質 領事近藤真鋤 陸軍歩兵大尉水野勝毅
 全中尉松岡利治 全工兵中尉堀本禮藏 全歩兵軍曹千原秀三郎
 全省語學生徒武田甚太郎 岡田某池田某黑澤某 海軍中軍医佐
 川晃 二等警部岡兵一 一等巡查小林志津三郎 全廣戸昌克
 △全二等官鋼太郎 全遠矢庄八郎 全五十嵐惠吉 全川上健助 全池田
 為義 全三等横山貞夫 全本田親友 十等属淺山顯藏 御用掛杉村
 潜 全久水三郎 全大庭永成 全曾庸輔 公館雇高雄謙三 全水島
 義 全鈴木金太郎 全飯塚玉吉 其他公使領事の従者等

朝

鮮

雲

海



卷中遭難人名

△印戦死セ一人

全權公使花房義質 領事近藤真鋤 陸軍歩兵大尉水野勝毅
 全中尉松岡利治 全工兵中尉堀本禮藏 全歩兵軍曹千原秀三郎
 全省語學生徒武田甚太郎 岡田某池田某黑澤某 海軍中軍医佐
 川晃 二等警部岡兵一 一等巡查小林志津三郎 全廣戸昌克
 △全二等官鋼太郎 全遠矢庄八郎 全五十嵐惠吉 全川上健助 全池田
 為義 全三等横山貞夫 全本田親友 七等属浅山頭藏 御用掛杉村
 溶 全久永三郎 全大庭永成 全曾庸輔 公館雇高雄謙三 全水島
 義 全鈴木金太郎 全飯塚玉吉 其他公使領事の従者等

明詳切





繪本朝鮮異聞初篇

訥亭 岡本 湖月 編

朝鮮國我邦と約を結び通信貿易を開くふ當り我政府ハ特ふ全權公使ヲ遣り館を京城ふ營きて爰ふ居り彼我交際ノ事柄より其他百般ノ事務ヲ執らむ時ハ明治十五年夏七月思ひよらざり變事ト起り是月二十三日午後五時ごろ京城の我公使館へ宛て亂民兵隊と合し襲來る模様ありとの書狀が届き一ダ斯る惡戯をして人を驚うは事ハ度々なきバ公使館の人も左

のこ心ふ止めぬ居る處へ差備官李承謨堀本中尉が兵制を傳習するららの士官ふて尹雄烈の下役が驅け來る暴民來襲の事を告げ一ゆえスハ大變なりと防禦乃用意を以る折しも公使館雇ひの朝鮮人が大わらひにて走せ付け只今陸軍語學生三名が練兵所より歸り道暴民の爲め不取圍まれ命も既ふ危ふ一と息を切ての注進ふ打捨て置るまはと巡查三名が救ひ出さば程もあらせば公使館の後ろふ當りドット揚げとる波ふ驚いて顔り見まは裏手の山ハ暴民が雲霞の如く



朝鮮
 新聞

押寄せ石瓦を雨の如く投げ落し中ニ鉄砲をも打ちめ
 バ如何も防がんと手術もなく館門を閉ぢて表口の来襲
 を防ぐうち火を放ちたる者ありて見るうち火の手ハ
 燃え擴がり焰煙空を蔽ふと瞬間ニ公使館も焼落ち残
 し公堂と清遠閣といふ接待所のニ屬官淺山頭藏巡
 査小林志津三郎ハ短銃を以て放火者を狙撃し四五人
 を斃せしゆ之暴徒ハ少く躊躇しりども四方の圍ニハ
 多に重なりて銃を放ち矢石を飛ばし叫ぶまけん
 門まで攻め寄館内へ打入る者一人もなからせし人々

心と思ふやう暫く支へし時を移さば朝鮮政府より兵
 隊を出して必ら此暴徒を鎮壓するらん銘々死力を
 を盡して相防ぎ其夜十二時ころ小及ふといへとも政
 府より救ひの兵ハ出さば暴徒ハ追々勢加たり笛を鳴
 らし鯨波を作りてさまたき有様なき一同行公堂ニ
 集り公使の令を出さるるを待つ水野大尉先づ曰く事
 既に爰ニ迫る從容此處ニ死を待つや或ハ一方を突抜
 き協力をせよと暴徒共を切り散らし運を武力ニ試
 ん水島小林ハ突出して後山ニ登りて間道より楊華津

奮戦突戦
死を決して
血路を開く



み出づべしと云ひ岡警部（おかのけいぶ）の後山（のちのやま）の路（みち）嶮（あやむ）しとて一同（いっどう）が揃（そろ）てハ登（のぼ）らるるを敵山（てきのやま）上（かみ）より拳（こぶし）下（くだ）りし打（うち）れたる徒（とら）らみ矢石（やせき）の為（ため）に命（いのち）を隕（おち）さん夫（その）よりハ正門（せいもん）を開（ひら）けし敵（てき）を引受（ひきう）け死人（しにん）の山（やま）を築（きず）き日本男子（にっぽんなんし）の武勇（ぶゆう）の程（ほど）を示してととせんと評議（ひょうぎ）區々（くく）なきは其決（そのけつ）を公使（こうし）み乞（こ）ひし花房公使（はなぼうこうし）の形（かたち）を正（ただ）し曩（なま）も韓人（かんじん）の報（あやせ）み依（よ）き王宮（わうきゆう）並（なら）し閔氏（みんし）の邸（うち）をも亂民（らんじん）が襲（おそ）ひしとの事（こと）なきは容易（やす）の暴徒（ぼうと）にあらび斯（か）る變事（へんじ）に遭（あ）ひし一身（いつしん）の存亡（ぞんぼう）より詮（せん）じし所（ところ）の國威（こくゐ）を辱（はな）しめざるに在（あ）り暴徒（ぼうと）何千人（なんせんにん）ありとも是

皆烏合（みなうが）の集（あつ）り勢紀律（せいきりつ）なく隊伍（たいぎ）整（ととの）えねば破（やぶ）るに難（たが）き事（こと）あるべしとて一（ひと）まづ正門（せいもん）より突出（とつしゅつ）して大路（だいろ）を經（へ）て京城（きやうじやう）觀察使（くわんさつし）の營（えい）に到（いた）り守護（しゆご）を乞（こ）ふし若（わ）し觀察使（くわんさつし）に於（お）て守護（しゆご）ける能（よ）えば王宮（わうきゆう）も趣（おもむ）き國王（こわう）と安危（あんゐ）を共（とも）みしべし我國（わがくに）の恥（はにか）を山野（やまの）に曝（さら）す事（こと）なりきと云（い）ふよ人々（ひとびと）一（ひと）致（ち）して隊伍（たいぎ）を整（ととの）へ番號（ばんごう）を定め総員（そうゐん）二十八人（にじゅうはちにん）岡淺山（おかあさやま）を先鋒（せんぽう）とし千原水島（ちげんみづじま）を跡備（あとび）へし死（し）を決（けつ）しし勇氣（ゆうき）をうととドツ（どつ）と喊（おほ）いて叢（むら）がる暴徒（ぼうと）の中（なか）へ切り入り當（あた）るを幸（さい）ひ二十余人（にじゅうににん）を斬倒（きりたお）せば怖（おそ）きてサツと左右（さうぶ）へ分（わ）る



公使の一行
 觀察使の
 營に入到了
 守護を乞
 えんとし

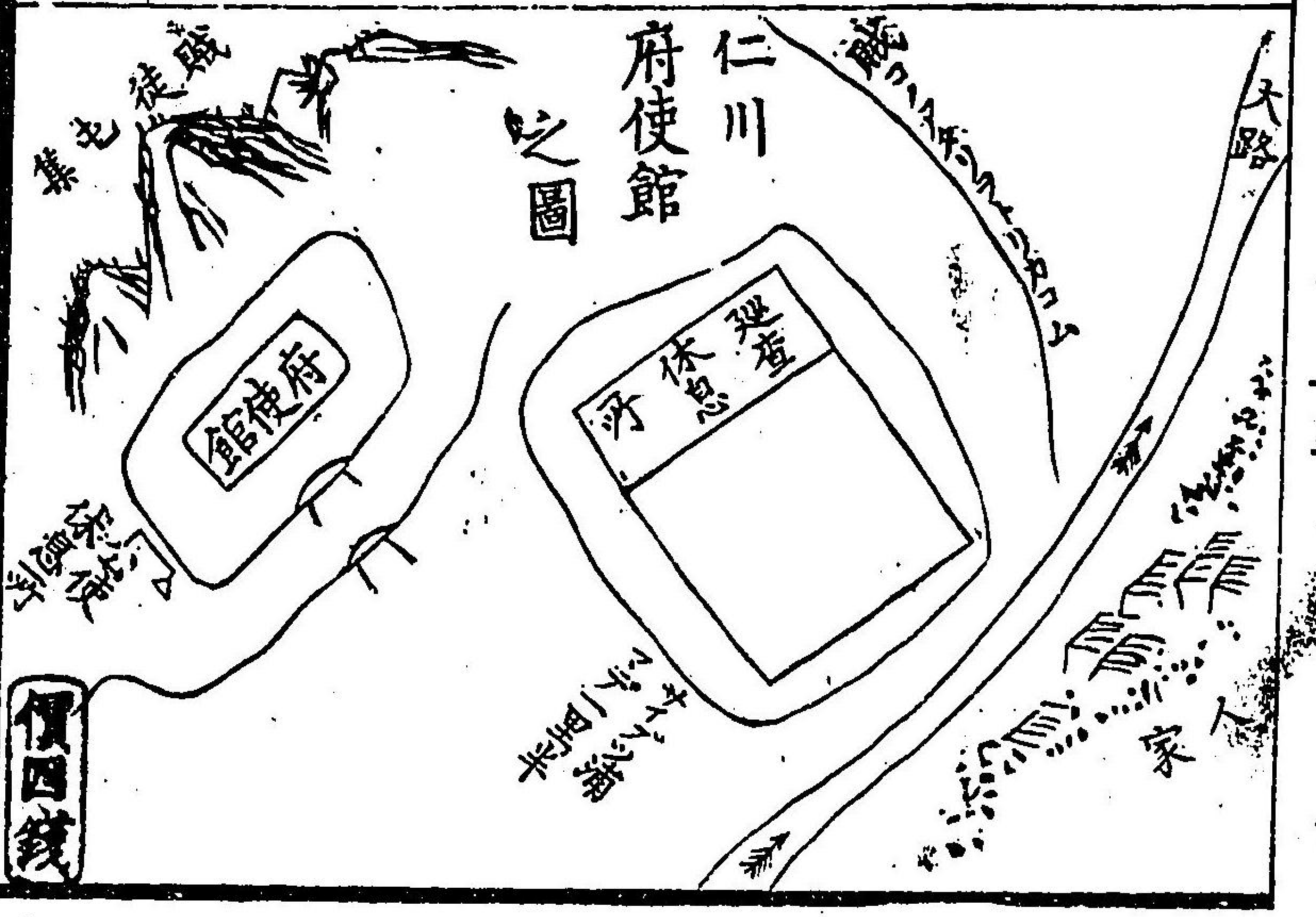
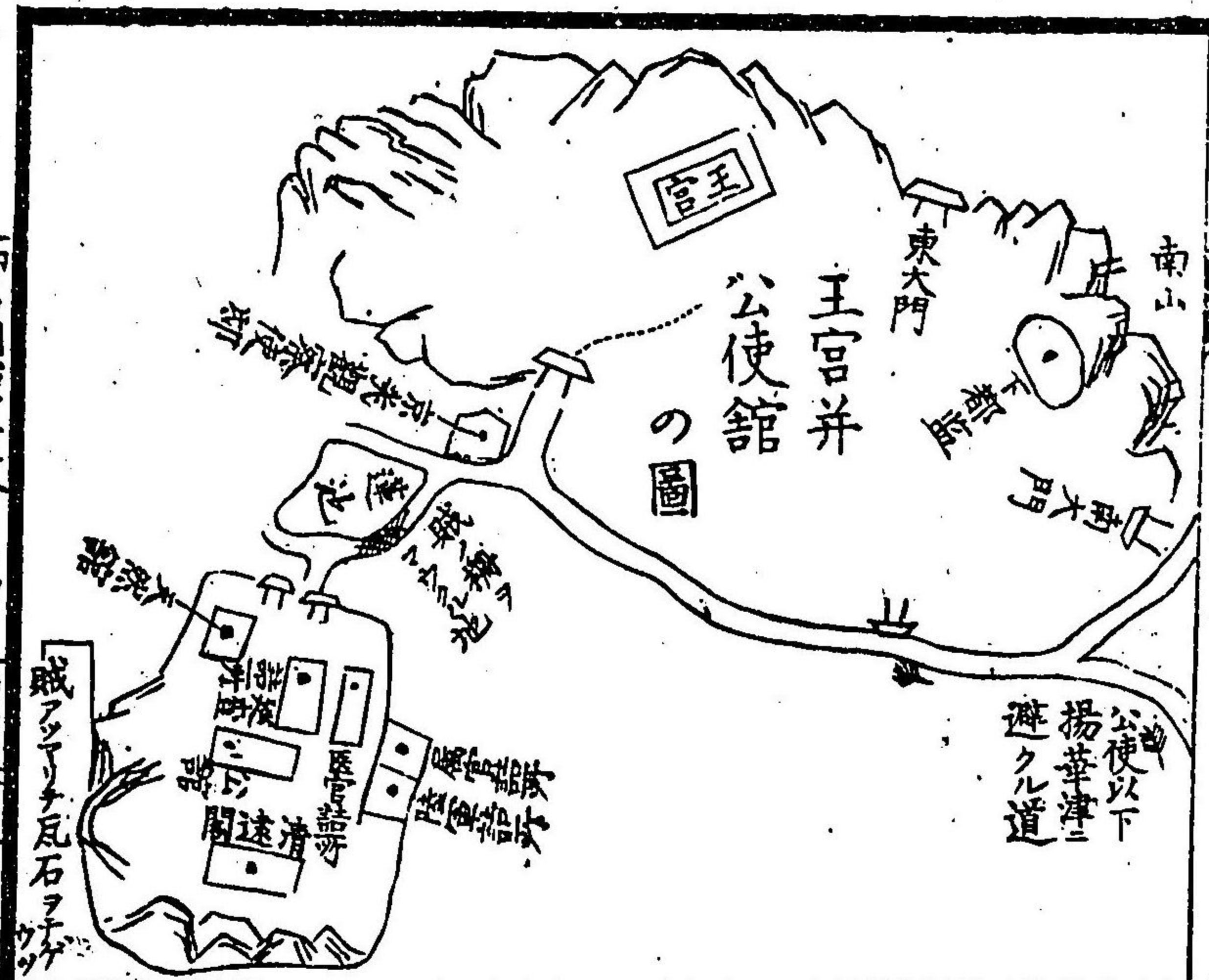


中へ一條の血路を開き大路へ出て觀察使の營へ到き
 門へ開けて守る人なく大門の内へ入れば樓上より
 四五人瓦を擲るればあきば短銃に脅く二門を過
 ぎて宣化堂へ至るよ寂として音もなき察するよ觀察
 使もまじく王宮へ入るならんと足を止めて王城の
 南大門へ至る扉をくたれた門將を呼ぶとも絶て答ふる
 者なく南大門といふ一崇禮門と云ひ其形ちん切
 石を疊きて穹隆状をなす上は二層の櫓を置く門の扉
 へ皆を鍊をぬつて包む王宮八門の中へ入つとも宏

大なる門あり花房公使の一行へ爰へ至る大音揚げ
 名を通さるるも鍊の扉固く鎖し音もなき公使も今
 我方も是み於て盡まり寧ろこの地へ在つて襲撃
 を受けんより一まが楊華津へ至る後ちの圖を運らさ
 んとて色より道を轉じて楊華津へ向ふ折しも降雨を
 げしと帽も衣服も雨雲と濡き浸り道路へ暗く
 てまばく岐路に迷ふよ振るのへれば公使館
 のまじく焼け落ちぬ火の光を空へうつりて赤き
 互ひは顔りなき憤怒の氣胸みせたり歎息の外なり

一が夜通し一歩走らず二十四日の明方揚華津不達し
 此處の鎮兵隊の屯所も依りて京城の様子を聞かん
 と思へど微弱しと頼む不足らざれば一書を鎮將に
 托して同文司經理事並びに京城觀察使に寄せ其大
 意へ前日來の形勢の大畧を述べ政府の兵を出して保
 護を待たせしむ一人の兵士もまさらば王宮に到ら
 んとされば南大門開くは己むを得ば避けて仁川府に
 かもむらんとは望むらくは貴國政府速く亂民
 を鎮壓するの計をなすをとりふらんとすきより同

舟を出て渡口に臨み渡守を呼ぶども皆を逃げ散りて
 來りしものやうなまの淺山へ川縁を駆け廻つて一艘の
 船を得來り自ら艦を押し人々を渡り前夜よりの暴
 風雨も雷鳴さへ加わり道路の恰も沼の如く一足づ
 づ疲れた覺え午前十時ごろ富平の咸谷里といふ處
 におひつりいふや百姓家に入り麥を炊かせて飢を凌
 ぎ暫らく勞を休めり
 朝鮮異聞初篇終
 編者曰次不出せる圖は彼の國王城の地形及仁川港
 の稟畧を示しつり者めて本文を讀む人の便に供す

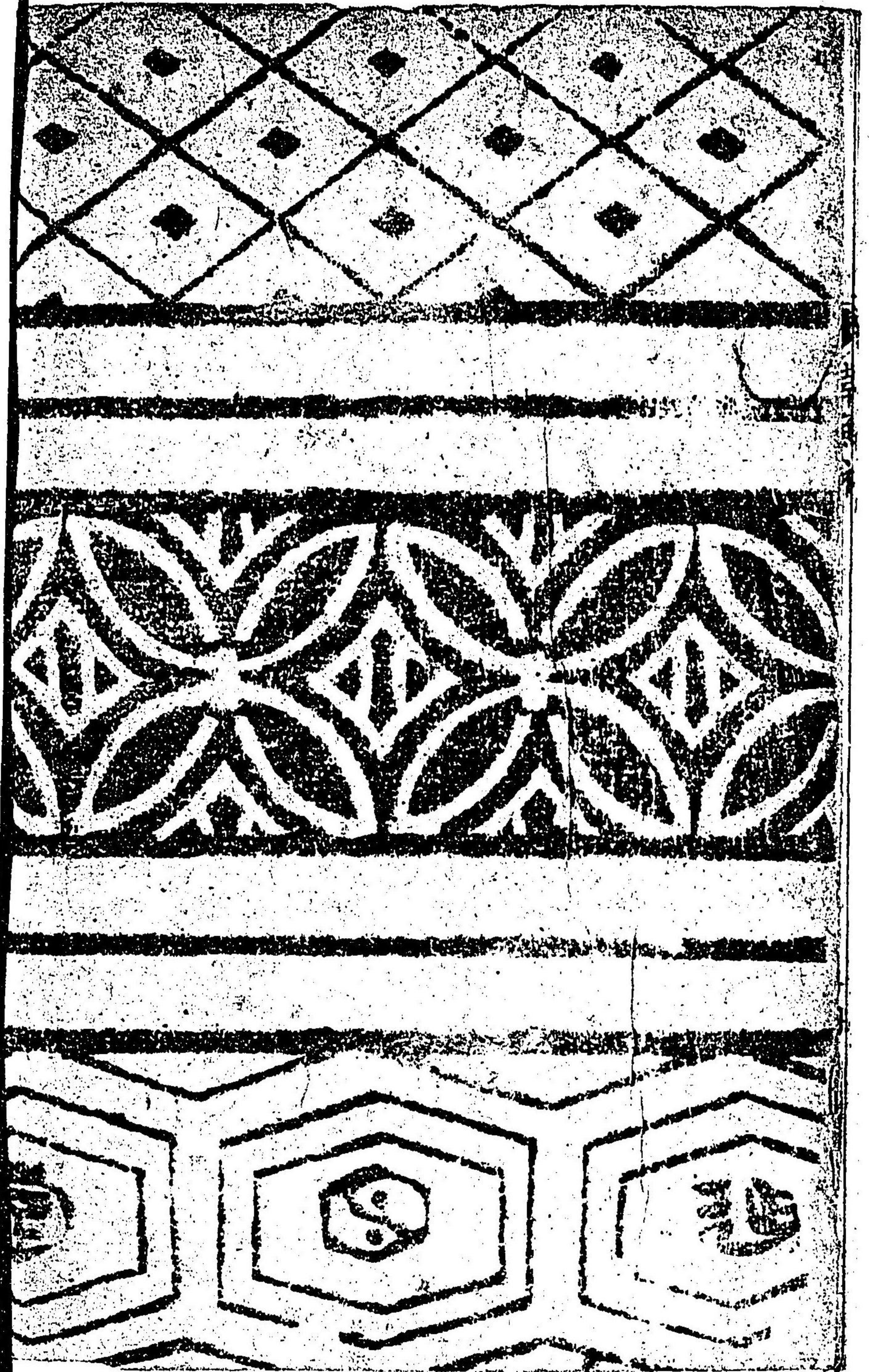


柳屋明治五年八月十四日編輯人日本シニ區海正岡本竹二郎出版人全區通三丁目小林鐵次郎

- 義士銘々傳 十八ヶ條 一冊
- 武田軍記 一冊
- 大日本東西軍記 二冊
- 諸國英雄軍記 二冊
- 報國大和魂 四冊
- 田宮坊太郎一代記 一冊
- 天艸軍記 二冊
- 豊臣太閤記 四冊
- 鹿兒島軍記 十冊
- 大坂夏冬御陣 四冊
- 七體名頭字盡 一冊
- 明治太平記 廿四編出版 定價廿三錢

- 楠公三代記 十冊
- 會津軍記 二冊
- 櫻田講談 二冊
- 日吉丸一代記 二冊
- 白石噺一代記 一冊
- 伊達大許定 三冊
- 平井權八一代記 二冊
- 改正世界國盡し 一冊
- 教草七ツいろは 一冊
- 延壽百人一首 一冊
- 大日本海陸里程全 一折
- 東京 日本橋通三丁目十三番地 丸屋 小林鐵次郎板

刷印兼版鉛型紙社文兩聞新入繪京東



特42

806



205070-001-8

特42-806

絵本朝鮮異聞

岡本 湖月/編

M15

EDV-0069

